

15 班

私は、この企業大学訪問を通して自分の将来についてより深く考えたいと思い参加しました。漠然と医療系の仕事につきたいと感じており、訪問で働いている方の本心を聞くことによって、自分がどう進むべき多少なりとも知りたいと思っていました。

そして、仙台厚生病院にて院内の見学と天野篤先生と池田知也先生にお話を聞くことが出来ました。天野先生は天皇陛下の手術をされたこともある有名な方であり、池田先生は国境無き医師団に所属していらっしゃるというどちらの先生もなかなかお話を聞ける方ではありません。今回の訪問はとてもすごいことだと思います。

院内の見学では、医局の様子を知ることが出来たり、病理医の先生に本物の癌を見せていただくことが出来ました。病理医という存在をよく知らなかったのですが、病気にかかった内臓から研究して治療法を見つけるということに興味を持ちました。

実際に本物の内臓を触ったことは、なかなかない体験ということもあり、記憶に残っています。癌を見て、触ったことで癌という病気を少し理解できた気がしました。

天野教授とのお話では、30分ほどしか聞くことは出来ませんでした。有意義な時間になったと思います。特に記憶に残っていることは、医者になるには自己犠牲が必要ということ。なにかあった時に自分を捨てることができない人は、ならない方がいいということを知りました。

また、ひとつ驚いたこととして先生に「天皇陛下の手術のときにはやはりほかのときとは違う緊張があったのか。」と聞いたところ、「全くなかった。」と答えられたことがあります。

天皇陛下の手術でも、一般の方の手術でも、同じように接することが出来るというところに驚きました。そして、医者としての精神力とはどのようなものかというのかわかった気がしました。天野先生は、「二の矢、三の矢」を準備しておくことが大切だとおっしゃられました。勉強だけでなく、なにか別のものにも精通しておくべきだということだと思います。大学に入るまでも、入ってから、勉強はたくさんしなければいけないと思います。しかし、天野先生のおっしゃった通り、二の矢、三の矢を持つことによって、医者になった時により患者さんの力になれるのではないかと思います。私は今特に矢となるものを持っていませんが、高校生活の中で見つけていきたいです。今までは、はっきりとしていなかった医者という職業ですが、実体をもちはじめたと思います。私たちからの質問にすべて答えていただき本当に嬉しかったです。高校の時から今までのお話を聞くことで、これからの自分がどう進めばいいかというのを、想像しやすくなりました。浪人生活から天皇陛下の手術を任されるほどの医者になるには、人並み以上の努力があったと思います。天野先生の話を知っていると、私にはまだまだ努力が足りないように感じました。

また、天野先生のお話を聞くことで、自分が思っている以外の道にも別の良い点があるということを知ることが出来ました。浪人することは、のちに苦勞を知ることが出来るというポジティブな考えを知ったので、私も嫌なことがあっても、良い方向に考えられるようにしたいです。

池田先生のお話では、国境無き医師団のスライドを見せていただいたり、質問に答えていただいたりしました。先生の医者になったきっかけは、国境無き医師団の方の話を知ったからということでした。その中でも池田先生にとって衝撃的だった言葉というのが

「私が少し眠っただけで大勢の方が死ぬ。」という言葉でした。

少し眠っただけでたくさんの方が死ぬというのは、この平和な日本にいただけでは到底知りえないことだったと思います。私は、大きなきっかけがあって医者になりたいと思った訳では無いので、このような体験を聞くことは、参考になりました。

国境無き医師団についてはほとんど知りませんでした。どこで活動しているのかやどのような方々がいるのか知ることが出来ました。災害や戦争が起こった時にどこよりも早く現地入りし、緊急医療援助を得意とし、マラリアのような地域特有の疾病の撲滅にも力を入れています。

また、医師団には10の原則があります。

1. 第一に医療援助活動
2. 証言活動
3. 医療倫理の遵守
4. 人権の擁護
5. 独立性への配慮
6. 基本原則：公平性
7. 中立性の精神
8. 義務と透明性
9. ボランティアからなる組織
10. メンバー一人ひとりが参加し動かす組織

オペレーション事務局とよばれる活動の運営を担当し実際の医療チームを編成、派遣するところは、オランダ、スイス、スペイン、フランス、ベルギーにあります。また、パートナー事務局という活動に参加するボランティアを募集、派遣する。広報、募金活動を行うところは世界各地にあり、日本にもあります。

国境無き医師団は、自分の思っていたものとは少し違って、医者だけでなく、非医療従事者によっても支えられていることを知りました。危険な場所へ行き、敵も味方もなく助けるという姿勢はとてもしっかりと感じられました。池田先生は、外科医をしていらっしゃいますが、国境無き医師団の中では産婦人科や整形外科なども担当しなければいけません。もちろん専門的な細かい部分まで習得することはできないものの、基本的な治療は行うのです。この話は私の中では結構衝撃的でした。私達は普段自分の病状にあった病院に行くことができます。外科の先生が整形外科にくることはないですし、内科の先生が産婦人科に来ることもないでしょう。それが、紛争地域や災害現場では、圧倒的な医師不足により、1人の医者にいくつもの仕事が任されているのです。池田先生のお話は私に医者としての別の道を見せてもらったように思います。国内で医者と働く人も大切だけれども、国外で人の命を助ける医者も同じくらい大切なのだと感じました。池田先生は二高の大先輩ということもあり、高校生時代のお話を聞くことでより身近に感じられました。

天野先生のお話も池田先生のお話もとても参考になりました。実際に医者について聞くことで、より明確なイメージを持つことができたと思います。様々な場面での考え方や対処の仕方は納得ができるものが多く、興味深く聞くことが出来ました。また、どちらの先生も同じ医者という立場ながら、全く違うみちを歩んでいらっしゃいました。それぞれ違う話を聞いたことによって、私の中での医者という職業がはっきりと形作られたように感じられました。自分の知らない世界と触れ合うことは、こんなにも

知識の幅が膨らむのだということを知れた日でもありました。院内の見学でも、病院の普段見ることができないところもみることができたのは、いい経験になったと思います。特に病理医の先生とは、普段生活している中ではなかなか触れ合えない職業だと思うので実際に話を聞くことができたのはとても良かったです。

この体験から、私は将来についてもっと真剣に考えようと思いました。今までは、漠然としていてなってみたいという気持ちだけで決めていました。でも、実際に仕事をしている方に話を聞くと、自分の知らなかった大変さがよくわかりました。本当にその職についたら、重い責任が付くということを改めて実感しました。今まで安易に考えていましたが、将来の仕事は、一生を左右する大切なことなのでしっかり考えていきたいです。

最後にお話を聞かせてくださった天野篤先生、池田知也先生、仙台厚生病院の方々本当にありがとうございました。